

風のことば 水のつぶやき

中村三郎*

1 はしがき

早春の休日、葉山町の知人に誘われ、葉山－嶺岡構造線沿いの尾根線を3時間ほどかけて踏破した。町民の皆さん60数名、内20数名の小学生も一緒であった。険阻な山道が多く心配したが、彼らは身も軽く、転倒しては！と息をのんでも元気よくすぐ復活する。むしろ年配の参加者が難儀していたのかも知れない。県砂防、村上さんもご同行いただき、砂防・防災の楽しい勉強も出来た。踏破した直後、「君たち山で何か聞こえた？」などと問うと、「足で踏んづける葉っぱの音」とか「風の音、風は木の枝や葉っぱを伝わって下りてくるのかなー」などと元気な返事が戻ってきた。人里離れた山道を歩くと、ちょっとした音や雰囲気も彼らの耳や気持ちに伝わるのであろうか。先年、南アルプスの三峰川上流の地質調査に入った折、聞いたこと、考えさせられたことなどを思い出した。

2 風のことば

三峰川（天竜川支流）上流に長谷村という村がある。この村は、中央構造線に沿って発達する適従谷沿いの村である。この谷は諏訪湖付近から天竜川の東側を南下し、豊川の河谷へ延びる谷の中間に位置する。古来、信仰の道・塩の道・戦いの道などとして人々の往来もあり、この構造線谷は地域の歴史や風土と深い関わりをもつ。

現地では、村の森林組合長である小松正晴さんのご同行をいただき、歩きながら数々の貴重な話を聴くことができた。彼の自宅は、一番奥深い集落で、三峰川の河床を160mほど見下ろす地形面上に位置し、はるか東方向には、南アルプスの荒

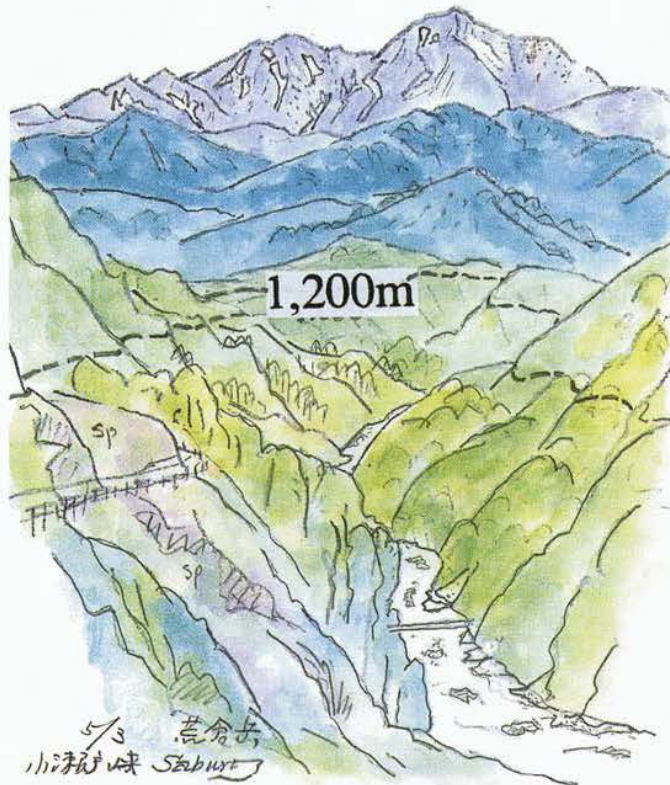
倉岳（2,517m）・間の岳（3,189m）などの稜線を眺望できる。少年の頃からこのような環境の中で育った彼の持つ五感の鋭さは格別で、私たちの想像以上のセンサーを持ち合わせているようである。

標高1,140mの浦集落付近までは、広葉樹のシラカバ・クリ・サクラ・コナラや針葉樹のマツなどが混じった植物相が多い。標高1,200mを越えると、コナラかミズナラなど「極相林」が分布している。これらの植生と土地条件とのかかわりを地元の方は全て承知している様子である。彼はいつも森や林を吹きぬける風の音色や、足下のV字谷を滔々と流下し、谷壁に反響する三峰川の瀬音に注意している様子である。音はいつも同じように聞こえてくるわけではない。風が、水が山野を通りぬける時、吸収されたり増幅されたりして、森の力や活性度に応じた音風景をつくり出している。自然性が失われつつある私たちにも、日常経験的に聞く音の認識はある。しかし小松さんは私たちには到底感知し得ない地域のサウンドマップを承知しており、折にふれその異常を把握しているようである。

樹林などの植生は、風・温度・水など自然条件の変化に対し生体電位が反応する（矢野2002）、一定のリズムをもっている生体電位の異常が植物に変化を与えるわけで、合歓の木・おじぎ草などの反応は理解し易い。自然と一体のように過ごしている人にとっては、植生－風－水－大地などの組み合わせと、それらの異変について把握することは、長年の素朴な経験から可能な技であったに違いない。1960年代、隣接する奥浦集落周縁の植生と湧水の異変にいち早く気づき、自主的に1、2軒の家の人々を転居させ、地すべりの被害から守ったときの話を聞き感服した。

「風の音色や川の瀬音はいろいろなことを教え

*防衛大学名誉教授・成蹊大学兼任講師、
(財)砂防・地すべり技術センター理事



■三峰川上流の小瀬峡より東南アルプス荒倉岳方面のスケッチ
三峰川上流の小瀬川峡谷（図中白く抜けている部分）のV字谷。図中破線は標高約1200mの等高線、破線以下は「先駆樹種」が卓越し、破線（1200m）以上には「極相林」が卓越している。高い山は荒倉岳（中村三郎、2003）。

てくれるなえー」山を歩きながら小松さんはつぶやいた。山と森を吹きぬける風の音、早朝、東のアルプスと朝日を仰ぎ知る光の具合によって感知する日常の「観天望気」。川の瀬のつぶやきで推し測る「河勢出水予測」など、村や三峰川下流域の縁者の安全を願う人々の生活の知恵であったに違いない。

3 「川ながれ」と「水つき学校」

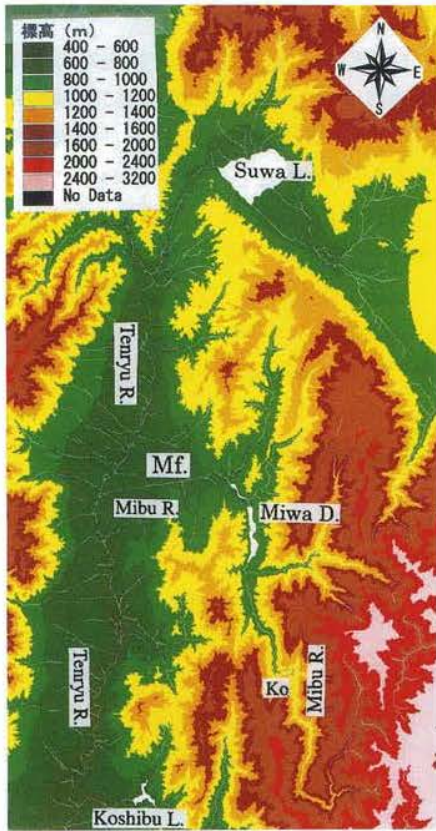
南アルプス北部の全ての支流を集めて流下する三峰川、上流右岸の戸草・左岸の浦地区は顕著なV字谷を呈する。平時は青白く透き通るような清流、その底には古期岩類や蛇紋岩体から生産された岩塊や河床礫が見えかくれしている。かつて下流域において、水遊びをしながら摩耗した色とりどりの小石を見付け、宝物を集めるような気持ち

で拾ったものである。

しかし台風やそれに伴う豪雨時には川の様相は一変する。川幅の割に流域面積の大きな三峰川の水量は一気に増水し流下する。その奔流をじっと見つめていて、引きずり込まれるような感じを経験し、身震いしたこともある。中央構造線沿いに北流した本流は、月蔵山山麓を穿ち先行谷性の峡谷となり西流し、高遠から一挙に広大な扇状地面へ流出し、天竜川の合流点に向けて乱流した。

長谷村誌の記録（長谷村1996）によれば、1798年から1959年の期間、三峰川とその下流域は3～4年に1回の頻度で洪水に襲われていた。加えて三峰川は、古来「暴れ天竜」の元凶ともなっていた。したがって流域近隣集落の人々は力を合わせ、洪水によるはんらん防止のための堤防構築にしばしば駆り出されていた。地域の最長老、故中村千別翁による「100年のあゆみ」によれば、「出水のときは頻度はげしく助け合いの人手として“もっこかつぎ”などの防災事業に挺身した」という貴重な記録が克明に報告されている（伊藤2000）。

三峰川が天竜川と合流する地区には下島新田があった。たび重なるはんらんによって、巨石累々たる河原に変貌する様相が記録されている。地元の碩学、向山雅重（1982）の記録によると、復旧工事に従事していた人々は、口々に「この河原へはもう2度と人は住みつけまい」などと強調していたそうである。しかしその後この荒地も再度利用され、1軒、2軒と家屋が建てられてきた。これも、平地の少ない土地の事情によるものであろうか。また新田・原新田などの集落名は、三峰川の洪水と土石流によってつくられたはんらん原に拓かれた農耕地を、「新田」と称したものである。台風などによる出水のあと登校すると、「川ながれ」などという話を聞いた。川のはんらんによって被災し、家屋ごと流されてしまったときのことを指す表現で、特に人が一緒に流された場合に川ながれなどと言っていたようである。時には子供が流されてしまったことなどを聞くと、その子たちの流されてゆく様子を想像



■天竜川・三峰川流域の標高段彩図

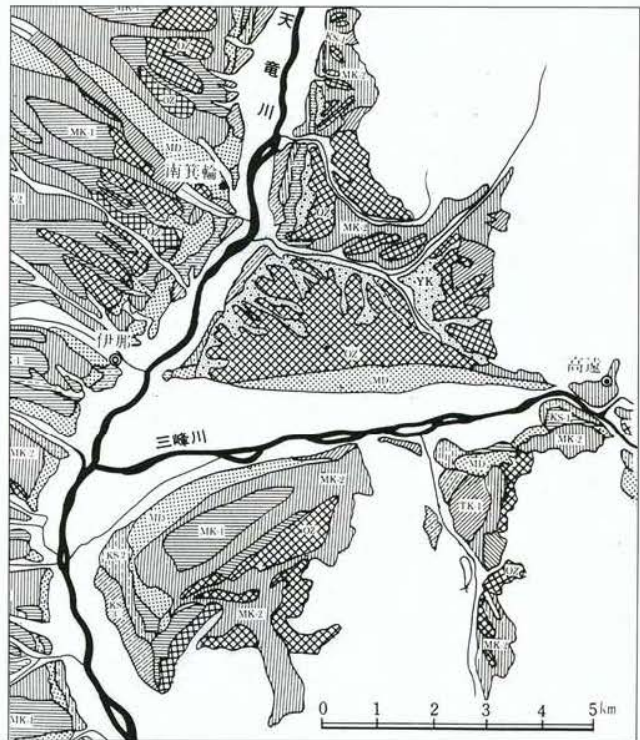
諏訪湖から流出する天竜川（かつてのあばれ天竜）は図中西寄り北から南へ流下し、途中で三峰川を合流している。図中央に美和ダムが位置する。三峰川は南アルプス北部全ての支流の水を集め、西流し天竜川と合流している。

Suwa L. : 諏訪湖 Miwa D. : 美和ダム
 Koshibu L. : 小渋湖 Tenryu R. : 天竜川
 Mibu R. : 三峰川 Mf. : 三峰川扇状地
 Ko. : 小瀬戸峡

※数値地図50mメッシュ（国土地理院発行）を使用して作成（図/安藤 潤、中村三郎2003）

し、悲しく恐ろしい気持ちで大人や友達の話聞いていた。私自身、川に対する確かな記憶を強く持つようになったのはこの頃である。

このような悲劇と、水防に対する地域の人々の絶え間ない努力と気持ちが込められた三峰川、そして暴れ天竜に対する長年の経過があった。1959年美和ダムが出来、その後は「洪水」・「川ながれ」・「もっこかつぎ」の話は聞いていない。かつて、とても住むに堪えない土石だらけの荒地は、長年の防災事業も加わり、今日では数万人の人々が安住する広大な居住地と耕作地に変貌した。自



■三峰川扇状地面の区分図

（天竜川上流域地質解説書（建設省天竜川上流工事事務所）より転載（pp.290-291）。

高遠の西には広大な三峰川扇状地（図-2中のMf.）が発達している。近世以降の氾濫原の上位には、右岸に3段、左岸に5段の河岸段丘がそれぞれ発達している。次の北沢優美らによる説明は理解し易い。

「何万年もかけて右岸から左岸まで奔流が走って土砂を堆積し河岸を侵食し、現在の段丘地形が形成され、その氾濫原の持つ性格が、近世の農民を苦しめた洪水・川欠けの原因となった」（北沢優美編著2000）。
 図中白い部分は新しい時代の氾濫堆積面KS-3は低位段丘Ⅱで風成テフラをのせていない。その上位KS-2.1、MD、MK-2.1は低位段丘Ⅰ、およびOZは中位段丘に区分され、それぞれテフラをのせている段丘面である（SHIMIZU 1972、参考）。

然条件を生かし、有史以来の不安を解消してくれたダムの効用と、はらん原の経過については案外知られていない、そして理解されていない。

前記の「川ながれ」話の後「水つき学校」という話も聞いていた。地元の小学校の加藤明治という先生が書いた童話のタイトルである。先生は赴任先の川路小学校において、天竜川沿いの学校が度々水につかる経験をした。流れつく動物や植物を目の当りにして、これも教材として子供と勉強した話を童話としてまとめたものである。この水つきの原因はダムである。1936年9 km下流に電

力会社の泰草^{やすおか}ダムが造られた。ところが、1944年にはダムの堆砂率は90%を超えた（2000年には78%）。川路地区における河床も数m上昇し水つきがはじまった。今日では、かつての学校付近もJRの駅も地盤の嵩上げをして、居住地・耕地に対する新しい対応を現出しているが、長い苦悩の期間があった。美和ダム上流においても、堆砂による河床上昇のため、ダム湖沿いの県道の位置を変えた。最近は土砂排除のためにバイパストンネルを通し、ダムのリフレッシュ事業も推進されている。

沈みこみ変動帯に位置し、造山活動の盛んな日本列島、ダムの堆砂が激しいことは、当初から予想されていた問題である。多くのダムにおける堆砂が70~80%を超えると、当然注目すべき問題となりその対応を迫られる。河川のはらん原、河川敷など居住域・耕地としてくまなく利用されている今日、治水・利水のリフレッシュにかかわる対策・対応の費用も多大なものとなっている。しかし現実には、下流域の数万人、数十万人の人々の安全にとっては、きわめて重要な役割を果たしてきているわけで、お金にはかえられない居住者の生存と安全にかかわる不可欠な事業である。堆砂への対応、堆砂中の水の活用手段などについても様々な手法が考えられている昨今、「川ながれ」や「水つき学校」の問題を超えた、治水・利水・河川周辺環境保全への努力が重要である。川の護岸や嵩上げた堤は目立たぬに越したことは無いが、河岸からみる遠い山や丘陵地、台地など自然と一体化した河川環境の整備などが推進されつつある。造山帯における地勢に見合う、土地利用計画の創出を見出してゆきたいものである。

4 水に流す風土

昨年ライン下りをした折、妖精伝説で著名なローレライを通った。高さ132mの岩壁や、川底に横たわる岩礁・岩盤などを観光しハイネの詩を思い浮かべた。しかし、造山帯のど真ん中に位置する天竜川沿いに育った私にとって、ローレライの川はとても急流とは思えぬゆるやかな流れの川である。ライン川下流域のオランダで生を受けたヨハネス・デ・レーケが、日本の川を見て「これは川でない滝だ!」と言った時の気持ちが理解できる。

今から百数十年前、幕府の役人が万国博視察のため欧州へ赴いた。当時最も先進的と言われたヨーロッパの大都市パリで異様な状況に出くわした。即ち、滔々とゆるやかに流れるセーヌ川や、そこへ流入する下水道へ、人々は人屎尿を投げ捨てているのである。その結果に由る臭気芬々たる街の環境に接し彼らは驚愕した。同じ頃の1858年、ロンドンのテムズ河畔ではグレートスティンク事件などもあった。幕府の役人は、あの糞いヨーロッパの「先進国」へは2度と行きたくない旨の報告をしていたそうである（石川1991）。

当時の江戸は、1800年既に徒歩交通年々、100万人都市であった。しかしヨーロッパの河川とは対照的に清潔で、隅田川などは白魚漁なども行なわれていたというほどきれいであった（渡辺1991）。また、人屎尿については、近郊の農民たちがこれを肥料として還元する地域的リサイクルが機能しており、街と村の清潔さが保たれていた。この制度は江戸ばかりでなく、わが国では第二次世界大戦直後まで行なわれていた習慣であった。

かつて映画「第三の男」を観た折、アントン・カラスのギターのメロディーと共に、パリの大規模な美しい下水道のシーンを見て、さすが文化の違い! など私は感銘した。ところが、その後パリにおける上記のごとき糞尿^{ふんにょうたん}譚を知って再度びっくりした。このようなパリと江戸の話の差は、文明・文化の程度の差ではなく、これは基層文化や風土の質の差がもたらすものと考えた。この風土の差は、とりもなおさず地勢の差に由来するのではないだろうか。

「水に流す」（いざごぎやうらみなどについてきっぱりと捨て以後こだわらない意）とか「一杯飲んで水に流す」などの表現を聞いたとき、私たちにとってその意図するところは大体理解できる。ところがこの表現、欧米の方々にとってはなかなか理解できないようである。これも前述のような地勢と風土の差であろうか、興味深い。

悠々と構造平野を流れる大陸の大河とその流域、造山帯に位置する短小な日本の急流河川を比較すると、地形条件はかなり対照的であり、水の流れ方にしても全く異なる。したがって両者にとって河川の中の構造物に対する処置や計画にしても、両者には異質な対応が必要であり、河川を不用意に「自然に戻し」両者一緒くたの対応をする

ドとソフトのバランスを取りつつ、よりソフトに軸足を置いた施策」(岡本 2003)を目的としている。法令の適切な運用と実行は、レスター・R・ブラウンの提言を先取りするものであり、新世紀への事業の展開に大きな役割を果たすものと考えられる。

身辺の斜面環境は、私たちのもつ社会的諸条件と不可分な結びつきにおいて成り立っている。今後は自然に対して人間がどのように働きかけるかが問題である。大切なことは、

- 1 現在は地球の長い歴史の果ての一こまであること、
- 2 自然は人間の理解を超える複雑なシステムであること(レスター・R・ブラウン)、
- 3 自然に対する脱桎梏のツケを常に承知しておくこと、

などについて十分認識を深め対応する必要がある。

今日までの生活とひきかえに失われた「自然に聴く耳と心」をとり戻す心がけも大切である。現場において行動しそこで培われる直観力と、理論の裏付けのある観測・計測の成果を組み合わせた上での手法を思考し、変貌する自然と社会に即応した環境保全を進めたいものであります。

本小文の記載にあたり、図面の調整と資料の作成において、菊山浩喜氏と安藤潤氏にお世話になりました。記して謝意を表します。

【参考文献】

- 1) 矢野三雄(2002)：森の力、p.235、講談社新書。
- 2) 長谷村誌刊行委員会(1996)：長谷村誌、第二巻自然篇、p.672、長谷村教育委員会。
- 3) 伊藤一夫(2000)：百拾歳の軌跡に学ぶ(1)-中村千別翁著「百歳のあゆみ」を機軸に、伊那路、No. 518、pp.81-86。
- 4) 向山雅重(1982)：伊那谷と災害、建設省上流工事事務所による講演会資料、p.22。
- 5) 中村三郎(2001)：人と栖、pp.1-8、地すべりフォーラム2001。
- 6) 北沢優美(2000)：三峰川ものがたり、pp.3-84、「語りつくす天竜川」、建設省天竜川上流工事事務所。
- 7) 天竜川上流工事事務所(1981)：天竜川上流域地質解説書、p.413、建設省天竜川上流工事事務所。
- 8) 上林好之(1999)：日本の川を甦らせた技師デ・レイケ、p.350、草思社。
- 9) 石川英輔(1991)：いやなことを忘れていけばいやなことが起こる、pp.14-25、現代農業、農文協。
- 10) 渡辺善次郎(1991)：「大臭気」と「月も朧に……」のあいだ、現代農業、農文協。
- 11) 岡本正男(2003)：日本の砂防 p.39、神奈川県砂防ボランティア協会講演会資料。
- 12) 郷津久男(2000)：砂防と地域づくり、pp.1-9、地すべり対策技術フォーラム、富山講演集、(社)地すべり対策技術協会。
- 13) 池谷 浩(1999)：土砂災害防止への情報共有、論点、読売新聞、12月1日。
- 14) レスター・R・ブラウン(2000)：地球白書2000-1、p.421、ダイヤモンド社。